

移住する人・受け入れる人へ——こんなことで困っていませんか？

本書を手にとっていただいたということは、あなたが関わる地域づくりに『集落の教科書』が活かせるかもしれないと考えてか、または『集落の教科書』というひびきに何らかの魅力を感じてのことだと思う。

本書のテーマである『集落の教科書』は、移住者を助ける地域ガイドブックで、“良いことも、そうでないことも、ちゃんと伝える”ことをコンセプトにしている。「当たり前のことを今さら、何言っているのだ」と思われる人もいるだろうが、そんな当たり前が当たり前ではなかった時が、ほんの数年前まであった。

私が大阪府高槻市から京都府南丹市に縁あって移り住んだ2014年当時は、“移住”という言葉が注目を浴び始める前で、私自身も“移住”というより“引越”という感覚が強かった。早くから移住促進に力を入れている自治体では、住宅改修の補助といった移住者に支援金を出す制度や、田舎暮らしの魅力を発信するツールなどを整えはじめていた。私は、それらの取り組みに対してひっかかりを感じていた。

「良いこと自慢による取り合い合戦の結果としてやって来た移住者は幸せになるのだろうか」「人の一生を左右する決断に対して誠実さに欠けているのではないか」という疑念を抱いていたのだ。

そんな私の思いを「京都移住計画(*1)」のメンバーで、学生時代からの旧友であるタナカユウヤ氏に打ち明けた。彼は「京都にいつか帰りたい、住みたいと思っている人たちをサポートしたい」と京都移住計画に込めた思いを教えてください、「住みたいと思えるところに住める社会を作りたい。その旗印になれば」と夢を語ってくれた。

彼の言葉に勇気をもらい、機会があれば地域を包み隠さず紹介する仕事がしたいと思うようになった。

チャンスは思いのほか早く巡ってきた。2014年の春、南丹市日吉町世木地域の振興会から「移住者呼び込むための冊子を作ってほしい」という依頼が、私の勤める「NPO法人テダス(*2)」に舞い込んだのだ。そして生まれたのが「良いことも、そうでないことも、ちゃんと伝えたい」をコンセプトとした移住ガイド『集落の教科書 世木地域版』(2015年3月、第1版発行。以下、『世木地域の教科書』)である。

『世木地域の教科書』が反響を呼び、『集落の教科書』やそれに類似した取り組みが、宮城県や石川県、富山県など京都府外にも広がっている。テダスが直接関わったのは10の地域だが、それ

以外の地域でも何冊も教科書が作られたと聞き、たいへん喜んでいる。

本書では、『集落の教科書』やそれに類似した取り組みが広がっていくことを願い、教科書の意義や特徴、つくり方、効果を解説する。また、地域づくりの参考になるよう、教科書づくりを通じて知った地域独自の工夫の数々を紹介する。

ここで紹介する内容をより理解するために、これまで制作された『集落の教科書』のどれか一冊を先に見てもらい(インターネット上のNPO法人テダスのサイトにある『集落の教科書』コーナーからダウンロードできる(<http://tedasu.com/kyotukasyo>))、現物の雰囲気を感じながら本書を読まれることをお勧めする。

(*1) 京都移住計画・京都で暮らしたい人の想いを応援するプロジェクトとして、2011年に活動を開始。

「居・職・住」という移り住む人にとって必要な情報の提供や発信を行なっている。

(*2) NPO法人テダス・京都府南丹市で活動するNPOのキーマンたちが集まり、2012年に設立。南丹市を拠点とする中間支援団体として、市民活動の支援や市民協働の推進をミッションに掲げて活動している。

1章 『集落の教科書』とは何か

教科書が生まれた背景、
どのような情報が必要か
を解説

移住をする人より

- Q1 『集落の教科書』を読むと分かることって何ですか？
→14ページ(1章1.ありのままをさらけ出す、その必要性とは?)
- Q2 『集落の教科書』の特徴って何ですか？
→45ページ(1章4.特徴②更新前提の仕様にする)
→47ページ(1章5.特徴③手書き項目を設ける)
- Q3 地元のルールって、絶対に守らないといけないの？
→37ページ(1章3.特徴①ルールには強弱がある)
- Q4 読むことによるメリットはなんですか？
→130ページ(3章1.移住希望者に与える効果)
→136ページ(3章2.新規移住者に与える効果)
- Q5 移住にあたって気をつけたいことってなんですか？
→34ページ(コラム ルールは誰の許可？ 何の権限があってか!)

移住を受け入れる人より

- Q1 つくることで、どんないいことがあるの？
→22ページ(1章2.地域の情報を網羅! 情報量が多いわけ)
→137ページ(3章3.集落・地域に与える効果)
- Q2 教科書には何を書けばいいの？
→22ページ(1章2.地域の情報を網羅! 情報量が多いわけ)
→72ページ(2章3.手順②調査項目づくり)
- Q3 どれくらい費用がかかるの？
→62ページ(2章1.教科書制作の流れ)
- Q4 誰向けの冊子ですか？ 誰に配ればいいの？
→65ページ(2章2.手順①読者ターゲットの設定)
→123ページ(2章7.手順⑥印刷製本)
- Q5 どんな内容が書かれているといいの？
→168ページ(コラム 「集落の教科書で発見! アイディア集」)

移住する人・受け入れる人あるある!? 質問集

2015年に作られた『世木地域の教科書』から始まった『集落の教科書』。教科書をつくる側(移住を受け入れる人)、読む側(移住をする人)の双方から受ける質問をまとめてみました。本書に書かれている内容がお役に立てば幸いです。



1. ありのままをさらけ出す、その必要性とは？

本書には、「集落」や「地域」という言葉が頻繁に登場します。私の思うイメージが読者に伝わるよう、最初に2つの言葉を定義しておきます。

【集落】家屋が1つのところに集まった最小自治の範囲で、私の関わった仕事のなかで言えば、少ない所で6世帯、多いところで207世帯という規模感です。

【地域】合併前の旧村範囲で、概ね小学校の校区エリア。300世帯から1500世帯の規模感をイメージしてください。

移住者を助けるために生まれたガイドブック『集落の教科書』には、「良いことも、そうでないことも、ちゃんと伝えたい」をコンセプトに、移住者らが地域に関わるために必要なこと・必要そうなことをなんでもかんでもできるだけ掲載しています。集落会費（南丹市では「区費」という）、その徴収方法、役員の決め方、葬儀、役務など、聞き取り調査で得た200項目以上のルールや慣習を、強制力の強弱を示しながら記載しています。また集落の変化に応じてそのつど内容を更新し、必要なときに必要な部数を印刷して活用しています。

本書ではまず、『集落の教科書』がどのような想いと社会背景の中で生まれ、どのような必要性

があったのかを説明していきます。

◎『集落の教科書』が生まれた背景

日本は、仕事や生活の基盤となる快適な環境を求めて人々が田舎から都会に移動していた時代を経て、徐々に全国どこでも不自由のない生活が送れるようになり、今では田舎に「ふるさと回帰」していく時代へとなってきました。

こうした住む土地も、家も、仕事も、自由にも選んでもよい時代に生きている私たちに課せられた命題の一つが、どこで・どのように生きるのかを考えることだと思えます。

私は学生時代に永住地を探そうと思いつき、テントと寝袋を持って全国各地をうらうらと旅しました。高知県十和村（現・四万十町）や島根県松江市、長崎県五島市など、私の心をわくわくさせる町にたくさん出会うことができました。そうした旅の中で、「私の存在が求められる地にいたい」という思いを抱くに至り、活動の機会をいただいた京都府南丹市に移り住みました。

南丹市の面積は約616平方キロメートルで、淡路島（約592平方キロメートル）より少し大きく、琵琶湖（約670平方キロメートル）より少し小さい。市面積の88%に相当する約542平方キロメートルを森林が占めています。面積のほとんどを広大な森林が占め、約3万1000人（2021年末時点）の市民が暮らしています。

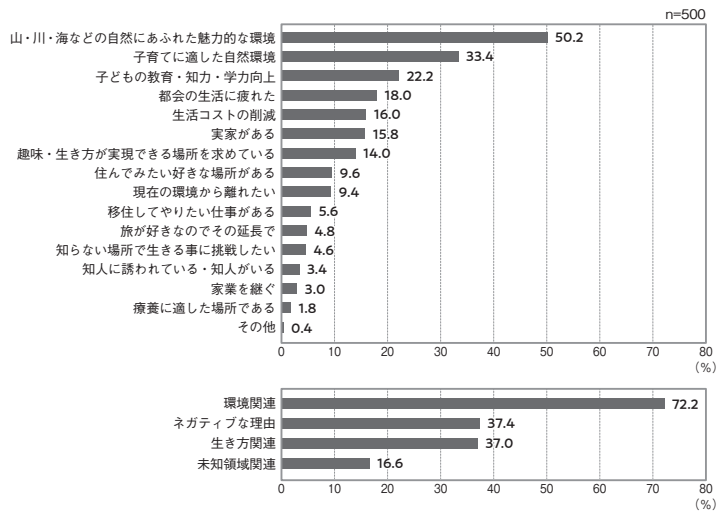


図1-1 移住に興味がある理由(一般社団法人移住・交流推進機構、2017)

東京圏に住む、移住に興味がある既婚の若者500人(20代~30代)を対象に行ったアンケート調査より(回答は複数選択、図は一部改変)。地方への移住に興味をもつ理由を尋ねたところ、環境にまつわる選択肢を選んだ人は、全体の7割超に及んだ

「子育てに適した自然環境(33.4%)」「子どもの教育・知力・学力向上(22.2%)」となり(図1-1上のグラフ)、環境にまつわるものが全体の7割を超えました(図1-1下のグラフ)。また「都会の生活に疲れた」「現在の環境から離れたい」といったネガティブな理由を選んだ人は、37.4%でした(図1-1下のグラフ)。より良い環境を求めて移住に興味を持つ傾向が見られます。

こうした気持ちを後押しするかどうかのように、自治体単位では、空き家バンクの仕組みがあるところや、住宅の改修補助制度、仕事の紹介

そして185ある集落のうち、50が限界集落(人口の50%以上が65歳以上の高齢者となった集落)、94が準限界集落(人口の50%以上が55歳以上の高齢者となった集落)という、人口減少と高齢化が著しい、いわゆる「田舎」です。

南丹市に移り住む前にいた大阪府高槻市は、面積約105平方キロメートルに約35万1000人(2021年年度末時点)が暮らしています。人口密度で比較すると、南丹市の約66倍となる都会です。

高槻市にいたころは自分の存在意義を感じられず、「もし私がいなくなったとしても、この町は何事もなかったかのように日常を刻み続けるのだろう」と思う憂鬱な日々を過ごしていました。ですが南丹市に生活の基盤を移したことで、自分の存在意義を大きく感じることができました。それは、単純に人口密度の差もありますが、人と人の結びつきの密度の差によるものだろうと思っています。

◎より良い環境を求めて移住に興味

私の移住動機はほんの一例でしかなく、田舎に移り住む人たちの思いは実にさまざまです。東京圏に住む、移住に興味がある既婚の若者500人(20代~30代)を対象に行った一般社団法人移住・交流推進機構(JOIN)のアンケート調査(2017年)があります。若者が移住に興味があると答えた理由の上位3つが「山・川・海などの自然にあふれた魅力的な環境(50.2%)」



などをしているところがあり、移住を希望する人への手厚い支援制度が整えられています。また、住民自治の地域組織も人口減を止めるため、移住者受け入れの取り組みを進めています。

それら制度と地域組織の後押し、先に移住した先輩たちの存在、移住相談に応じてくれる「移住コンシェルジュ」の存在などによって、移住のハードルはだいぶ低くなってきたようです。特に移住先の入口となってくれる移住コンシェルジュは、心強い存在ではないでしょうか。

移住に対する思いは前向きな理由やネガティブな理由などさまざまですが、いずれにしても、今いる環境から別の環境に移るのは、今の生活よりもより良い生活になることを期待しているからでしょう。この期待が大きければ大きいほど、それが叶わなかったときの不満も大きくなってしまふ。元あった仕事や住まい、周囲との関係を捨てて、文字通り“人生をかけて”移住する人にとって、期待が外れた不満はとても大きいものがあります。

◎移住者の不満…地域のしきたりや決まりごとがわからない！

私が移住者と話をしていたたびたび話題に挙がるのが、地域のしきたりや決まりごとです。実際に移住するまで知らなかった地域のしきたりがあり、同じ地域でも集落ごとに異なる場合があります。その集落の出身移住者（Uターン者）であっても、細かい部分は分からず困ることがあるのです。

2018年に京都府南丹市美山町鶴ヶ岡地域にUターンし、2019年に私とともに同地域の教科書づくりに参画した、ある地域おこし協力隊員は「葬式や役員など、自分の生まれた集落のことであっても知らないことばかりだと気づかされた」と話しており、移住後知る集落の独自情報の多さがうかがえました。

移住者は移住するまで知らないことが多すぎるのです。

期待と現実のギャップに不満を持つのは、移住者だけではありません。地域側も同じです。地域は移住者に対して、将来地域の担い手として役員や労働力、新しい風を吹かせる存在になってくれることを少なからず期待しています。そのため、単純に人口が増えることだけを良しとはしていないのです。ですが地域にこうした期待がある一方で、移住者に抱く不満もあります。

◎地域の不満…移住者が地域のしきたりを守ってくれない！

地域の不満の一つに「移住者が地域のしきたり（ルール）を守ってくれない」というものがあります。

実は多くの地域が事前にルールを伝えてはならず、また伝えるツールも用意していません。ルールを伝える“何か”を用意し、事前に知らせておくだけで、「移住者がルールを守ってくれない」という不満は減らせるのではないのでしょうか。



ほかにも地域側には「移住者が定着せず、出ていってしまう」という不満があります。移住者呼び込みのイベントを開いたり、移住者が住める空き家の掘り起こしをしたりと頑張ってきた地域にとっては、やっとこさやって来た最初の移住者が短期間で出て行ってしまおうと落胆し、移住者を呼び込んでいこうという機運が低下します。

自治体から100万円や300万円というような高額の補助を受け、地域がお世話を焼いて入ってきた移住者であれば、なおさら期待も大きくなり、短期転出の際に「裏切られた」と感じる気持ちはよく分かります。

定着しない理由は十人十色ですが、「共同作業（南丹市では「日役」という）や役員の役務が思っていた以上にたいへん」「地域と価値観が合わないと感じた」「良いイメージばかりを聞かされて来て、だまされたと思った」などといった「思っていたのと違う」知らなかった」という種類の理由の場合は、転出を防げるのではないのでしょうか。

◎地域と移住者のミスマッチを防ぐ『集落の教科書』

移住者と地元の人とのトラブルの多くは人間関係で、そのほとんどが相互の理解不足から始まり、場合によっては短期で転出するような事態にもつながっていきます。

“移住するまで知らなかった”を“移住前から知っていた”に変えることで、期待と現実のギャップを埋め、さらには相互理解を深めることで不満やトラブルを防ごうと、しきたりを明文化したのが、移住希望者向けガイドブック『集落の教科書』です。

“良いことも、そうでないことも、ちゃんと伝えたい”をコンセプトに編集を行っていますが、構想の段階では“良いことも、悪いことも”と表現しようと思っていました。しかし制作を進めていく中で、明らかに良いと思えることはあっても、万人に取って明らかな悪いことはないと感じました。

例えば区費について、高額だと嫌な感じもありますが、たくさんお金を集めるということは、それだけ区民に還元される支出（取り組み）があるということです。地域の役務が多いことを煩わしく思う人もいれば、「いろんなことに力を入れていて元気な地域だ」と思う人もいます。区民全員が葬儀に参列する習慣を面倒に感じる人もいれば、温かいと感じる人もいます。

集落についての良し悪しの判断は一律なものではなく、良い・悪いは、個々のフィルターを通してでないと語れないのです。こうしたことに気がつけるのも、『集落の教科書』をつくるメリットだと、私は考えています。